さとやま 2015年　春号（通巻130号）

■発行　特定非営利活動法人うしく里山の会
〒300–1236　茨城県牛久市田宮町808-20
tel 029-873-8552　fax029-873-8552

■事務局　牛久自然観察の森内
tel 029-874-6600　fax029-874-6812
http//ushiku-satoyama.org/
■編集　木谷昌史

さとやま

特定非営利活動法人うしく里山の会 広報誌 No.130

1.　表紙（エコアップ活動時の集合写真）
2.3. 牛久自然観察の森指定管理者受託事業
（作業の汗が芽吹きと笑顔に変わる季節）
4.5. 自然観察出前講座（ハプニングこそ自然観察の醍醐味）
6.7 牛久市協働樹木リサーチ事業
（「ひたち野みずべ公園」パンフレットの編集）
8. 里山保全エコアップ活動の御案内
9. 身近な樹木 No33 ウワミズザクラ
10. 裏表紙（タチツボスミレ開花（結束町にて））

牛久自然観察の森指定管理者受託事業

作業の汗が笑顔に変わる季節

ミツバツチグリの花に訪れるヤブキリの幼体。
多種多様な植物相が昆虫達を育む。

日本固有種のニホンカナヘビ。
冬眠から覚め、草むらから顔をのぞかせる。

若葉を出すムラサキシキブ。
園路沿いでは日の光が若葉を照らす。

林床植物たちの開花や樹々の芽吹きに、園路を散策する人々の顔もほころぶ眩しい季節が巡って来た。

毎月実施している園路沿いの植物調査（※注1）では、平成26年度、木本や草本にシダ植物を含めて557種類を記録した。

イチリンソウやオドリコソウ、ノジトラノオやタカトウダイといった希少植物がいくつもの群落を形成する度に、「牛久自然観察の森」の植物の多様性を感じる。

多様な植生を育むこの「森」の管理作業には、現在、年間のべ341名（※注2）の市民ボランティアの活動協力により支えられている。

活動開始から今年で10年目をむかえ、開園25周年にあたる4月1日には、NHK水戸放送局から取り組みについて放送され、活動へのエールをいただいた。（※注3）

冬、更新を促すため下草が刈り払われ、わずかな落ち葉と表土の現れた地面は、春、思いもつかない形で芽吹き、再創造される。週末には3世代が集い、笑顔と共に家族の思い出が生まれる。

都市生活を営む多くの来園者にとって「森」は非日常であり、その中で日常を再創造して行く意味で、Re Creation（レクレーション）の場所。

いつの時代も変わらず必要とされる身近な「森」を、未来を見据えながら、再創造をしながら迎えるこの季節、勢いづく「森」に驚かされるたびにボランティアの方々や地域の方々の顔が脳裏によぎる。

（木谷昌史）

注1：毎月第4金曜日、市民ボランティアの協力のもと活動している園路沿いのフローラ調査

注2：平成26年度の植生保全活動ののべ参加人数

注3：NHK水戸放送　44市町村みんなで！いばらナイト

牛久市レッドデータブック記載のイチリンソウ。
４月中旬、保全区画にて群落を形成し今年も開花期を迎えた。

野鳥観察をする親子。
里山で過ごした時間が思い出と変わる。

自然観察出前講座
「ハプニングこそ自然観察の醍醐味」

平成26年度の出前講座の実施回数は19回で、延参加人数は1，233人を数えました。参加者数の内訳をみますと、幼児458人、児童731人とその大半を占めています。

今回は、幼児や児童との自然観察活動を通して大切にしている要点をお伝えしたいと思います。

自然との触れ合いにやる気満々の子どもたち

いずれの幼稚園、保育園、小学校に出向いても、子どもたちの生き生きとした表情と、元気な挨拶は一緒です。自然観察への期待と意欲が伝わってくる心地のよい出会いがあり、いつも褒めてあげます。

観察場所（教材）の選定

子どもたちが普段接している土手や草地、林縁などの身近な自然をじっくり観察することで、多様な自然の営みに気づかせることからスタートします。

観察の展開

子どもたちの気づきを大切にしながら、生物間の関係性をじっくり観察したり考えたりします。

例えば、チョウやミツバチと花との関係性、クモと網との関係性、植物の葉と穴との関係性、犬の糞とそれに集まる虫との関係性などそのわけを、観察を通して見つけることが大切になります。

それは、自然の基本的な仕組みである生態系への意識の芽生えとなるからです。いづれにしても、こどもたちの発達段階を考慮した、楽しい観察を忘れてはなりません。

ハプニングを大切に

自然観察は、目の前の自然そのものが教材なので絶えず変化しています。子どもたちの観察眼はとても鋭く、魅力的で感動的な場面を突然発見してくれます。

例えば、カマキリがクルマバッタを頭から食べているところ、ジョロウグモが糸で獲物を巻いているところ、ミミズの死骸にアリが群がっているところなどです。

私の経験でも、目の前でお互いに飛翔中のシオヤアブがホバリングしながら、ノシメトンボの頭を捕獲し飛び去ったのを目撃したことがあります。

このようなハプニングこそ自然観察の醍醐味であり、大切にしたいものです。（石神良二）

牛久市協働樹木リサーチ事業

「ひたち野みずべ公園」パンフレットの編集

25年度「南裏市民の森」（以下「南裏」という）に続いて26年度も、市協働樹木リサーチ事業（以下・本事業）を「ひたち野みずべ公園」（以下・本公園）で行い、樹木及び植生調査を実施し、併せてPR用のパンフレット（以下・本パンフ）を作成しましたので、編集方針や留意点などについて説明します。なお、調査の概要については、本誌129号（冬号）において渡辺泰プロジェクト責任者が報告されています。

①パンフレットの表　上から図1・図2・図3

本パンフの作成は、26年度の事業計画で「南裏」同様に、A4版三つ折りとする。編集原稿は手作り、オンデマンド印刷にすると決まりました。

編集方針は、基本的には前回と変わりなく「市民に広く利用される―分かりやすい、見やすい、美しい」デザインとしています。ただし本公園は、その目的、規模、施設、植生や景観などが「南裏」と異なっていますので、その特徴をアピールするため、見どころ、楽しみどころの整理から始めました。

①面積が約6ｈａと大きく、中央の池を中心に緑地が広がり、水と緑の空間を満喫できる。

②緑地は森と草地からなっているが、森は公園造成前の自然林を部分的に残しながらも、ほとんどが広葉樹の人工林である。開園から約15年が経過した現在、自然林と人工林とが共存する自然の妙を見られる。

③公園の周囲は、ツツジ類を主体に低木（生垣）が植えられ、季節を感じられる。

④公園内は、縦横に散策路が走り、池見台、水上デッキなど多様な施設を楽しめる。

⑤四季折々に変化する自然を観察し、樹木や草花、虫や鳥たちの名前を調べるなど、知的好奇心が満たされる。

本パンフを手に公園を散策された方々が、これらをスムーズに体験できるように工夫しています。

❀先ず表紙は、①の水と緑の空間をイメージできるよう、横型としてパノラマ写真を配置し視覚的に表しています（図1）。

❀次いで②～④の森や樹木、生垣や諸施設の場所を分かりやすく示すため、裏面全てを案内図として、散策路を軸に各々の位置を記載しています（図4）。

❀②の森については、公園建設時の植栽記録により、その造成内容を大まかですが図示して観察しやすいようにしています。

森の造成は、自然林を残した保存林区、苗木（高さ約1m）植栽区、成木（高さ3～10m）植栽区と3区分されています。3地区の造成時における樹種構成をみると、保存林区は、サワラ、スギ、ヒノキの針葉樹が約20％、コナラ、クヌギ、ヤマザクラ、エゴノキ等の落葉広葉樹が約60％、シラカシ、ヒサカキ等の常緑広葉樹が約20％であり、針葉樹の用材利用と、コナラ、クヌギの薪炭材利用、これら利用の後退にともなう常緑広葉樹の生育など、かつての里山の姿を推測できます。植栽区は、コナラ、シラカシ、クヌギ、エゴノキなどで保存林区の主要樹種を基本に、新たにアラカシ、イヌシデが導入されています。全体としては、落葉広葉樹を主体に常緑広葉樹、一部に針葉樹を配置した里山となっています。また、保存林区に多いヤマザクラに加えて、植栽区（成木）でオオカンザクラ、ヤマザクラ、ウワミズザクラと開花期が異なるサクラが多数植えられ、春の公園を彩っています。

これらの区分は、現地では明確ではありませんが、その面影は観察できます（図4）。

❀目立ちませんが③の低木（生垣）も観賞に値するもので、ツツジ類、その他落葉樹・常緑樹別に図示しています。（図4）

❀⑤に関して、高木37種の一覧表を載せると同時に、樹名板［注］が付いている18種を赤字で示し、現地で確認しやすいようにしています（図3）。

5月16日（土）には本公園を中心に市主催「春の樹木ガイド」が予定されています。ご参加され本パンフの使い勝手を聞かせいただければ幸いです。

本パンフの発行などにご尽力された市緑化推進課、本事業の調査に参加された方々に御礼申し上げます。（羽賀正雄）

②パンフレットの裏　図4

［注］「うしく緑のネットワーク」が管理作業を実施。

なお、本年4月に「南裏」も高木35種のうち20種に樹名板整備。

結束町みどりの保全区
「エコアップ」作戦参加者募集のお知らせ

牛久自然観察の森に隣接する牛久市結束町の「みどりの保全区」の森林維持管理作業を行う「エコアップ作戦」では、地域の皆さんの協力のもと、下草刈りや除間伐、風倒木の処理等を行っています。活動には会員・一般問わず参加出来ます。皆様のご参加お待ちしています。

■活動日時：5月1日（金）9：00～11：00　17日（日）13：00～15：00
6月5日（金）9：00～11：00　21日（日）13：00～15：00
7月3日（金）9：00～11：00　19日（日）13：00～15：00

■集合場所　牛久自然観察の森ネイチャーセンター1階倉庫前　■予約　不要／荒天時は中止
■持ち物　長靴　軍手　長袖　長ズボン　※刈払機・チェーンソー使用は資格所有者のみ
■問い合わせ先　029-874-6600（担当木谷）

開花期の樹姿（宮澤 10.5.3 上柏田の日枝神社境内）と花序（渡辺 10.5.2　新地町の林縁）

身近な樹木

No.33

ウワミズザクラ

バラ科サクラ属の落葉広葉樹の高木（高さ15ｍ）です。国内では北海道の石狩平野以南から熊本県南部まで広く分布しています。牛久では斜面林や雑木林などに自生し、公園や神社の境内などにもしばしば植えられています。サクラという名がついていますが、一般的な桜の花とはイメージが異なり、写真のように白い小花が穂状に集まって咲くので白いブラシのように見えます。個々の花は見栄えがしませんが、4～5月の開花期には若葉の先端に白いブラシが無数に揺れているように見えて壮観です。

ウワミズザクラによく似た花として、イヌザクラが挙げられますが、イヌザクラは総状花序の下に付く小枝に葉がないのに対し、ウワミズザクラには数枚の葉がある点が違います。そのほか、イヌザクラは別名シロザクラとも言われて樹皮が暗灰色ですが、ウワミズザクラは暗紫褐色なので、花が咲いていない時期でも区別できます。

若い花穂や若い実を塩漬けにしたものは杏仁子（あんにんし）と呼ばれ、不老長寿に効があるとされてきました。果実は初夏には黄色く、次第に赤から黒く熟します。これを用いて果実酒を作るとおいしいうえ美しい色に染まると聞きました。名前の由来は、むかし鹿の骨の裏側に溝をつけてこの木を燃やして占いをしたので占溝桜と呼ばれ、のちに訛ったという説があります。

（秋山侃）

会員自主投稿

四年が過ぎて

震災の年に車で家族と被災地を一巡し、その後1人で2度ほどボランティアに出かけた。2年が過ぎようとしている時期であるのに「槌音が聞こえない、遅すぎる」と強く感じ、いつもニュースなどで気になっていた。

ある時、復興庁のHPを見て採用情報があり内容を見て履歴書を送り仙台で面接を受けた。勤めていた会社もすでに十分であると考え、7月31日に退職、8月1日採用3月31日までの任期付き職員として気仙沼市役所に派遣となった。

市役所から歩いて15分の派遣職員宿舎、家電付き1ルーム、空きの仮設住宅に住んでいる人もいる。行く前に幾度か総務の方から車は持ってこないのかと聞かれ、心配になり中古の軽を購入した。買い物や休日を過ごすために必要であった。幾度かの帰省もあったが1万7千キロ走っていた。

配属先は10月まで災害廃棄物対策課、震災ガレキの片づけと片づけ跡の復旧である。

技術1名、事務10名、派遣4名、臨時4名の計19名。派遣は江戸川区技術1名、鹿児島県2市から事務2名、そして私。

13年度で廃棄物は片づけるとの目標で仕事は進めている。ガレキが片付いていく中で跡地の復旧工事の発注作業。復旧には農地もあり、畦畔工、田面整備工など文字にすると理解できるが農業に全く縁のなかったので、はじめの会話では戸惑ってしまった。

跡地の土壌調査、20数ヵ所あった借地の精査。ガレキの処理は大手ゼネコンが請負、調査は大手コンサルタントが行っていてその監督精査、現場管理が主な業務である。それ以外の業務は地元の業者と進めることであった。

返地業務では仮設に住んでいる地権者とお話しに行ったがわからない、訛が強く言っていることがわからないのだ。帰り道に一緒に行った若い人に何度も教えていただいた。

仮設の住環境は悪く、隣のTVの音は聞こえ湿気もすごいと聞いた。震災前は広い家で住んでいたことを想像すると一日も早くと思う。

復旧工事の発注では、作業員および資材の不足で（落札できない）不調となり、年度末まで在席となったが、発注出来ないで移動することになってしまった。後で聞いた話だが、作業員および資材の不足などで不調になり発注出来なくなってしまったそうだ。

その後、希望であった震災復興を担うはずである職場に移動となった。市・町で震災復興を直接担う仕事は防災集団移転、漁港海岸保全事業およびこれらに付随した事業が主である。

新年度の移動先では北海道、宮城県、神奈川県、佐賀県、岐阜市、広島市、千葉市、新居浜市、江戸川区の自治体職員そして私と同じ復興庁派遣。派遣職員は35名中22名と60％以上。24年度初めは市職員の30％弱が派遣職員でありそれでも少ないという。震災で他の業務も影響を受け多忙になっている。25年度予算でみると2千億円余りのうち88％が復興関連であると言う、職員不足というのもうなずける。最近は自らの職員は派遣せず、経験者を採用して任期付き職員として派遣している。色々な派遣形態があり条件もちがった。

新たな職場は多忙になった通常業務を行うことになりがっかりであった。自ら工事の設計と積算施工管理をおこなった。パソコンソフトで図面を書かなければならず稚拙な図面と初めての積算システムを使い積算し発注をおこなった。あとからあの工事は雨災になるからと言われて、何のことやらと。私と一緒に仕事をしていた人は他市からの派遣の方で役所の仕事を教えていただいた。民間との違いを感じた。また税金には色々なポケットがあるものだとも。

震災前は仕事の奪い合いであり建設会社も減っていたと聞く、今は人手も少ないが仕事を選んでいる。気仙沼に支店を置いて他県から来ている建設業者もいる。発注にあたっては業者にお願いして入札に参加してもらい予定の年度予算を消化し終えることができた。

税金の動く金額は大きく、これらに群がる輩がいるのは誰でも知ることである。早急に震災復興は行わなければならないが将来に負債を残さずにできないものかと考えずにはいられない。

防潮堤の工事もこれから本格化。盛り土、かさ上げ工事も今年度中、基盤整備が一応の目途がつき建物工事が本格化してくるので一段と忙しくなることだろう。

観光してお酒もおいしかった。親子で野菜作りもやってきた。機会があったらお話ししたい。（飯田雅俊）